

異国の丘シベリアの条件

愛媛県 池田 政治

私は愛媛県大洲市長浜町の農家に五男一女の長男として生れ、松山市にあった当時の愛媛県立松山農業学校に入学した。当時中等学校では教練という科目があつて、松山の堀の内にあつた十二連隊から現役の陸軍中尉が教官として派遣されており、軍事教練を受けていたが、中でも射撃については興味もあり自信を持っていたのである。

昭和十六（一九四一）年の第十二回明治神宮国民体育大会愛媛県大会で一等賞をとり、昭和十六年の十月末に行われた東京大会に参加する事が出来たが成績は十一位であつた。当時は現在の松山空港の所に松山第二十二連隊の射撃場があり、東京大会前の約二カ月間は、毎日実弾射撃で練習したものであるが、これが軍隊に入ってから大いに役に立つ事になった。

持っていたので、馬の飼付や水飼の作業が朝食前にあり、士道神社までの駆足と併せて大変な訓練であつた。

昭和二十年八月九日、ソ連軍がソ満国境を全面から一斉に越境して来たために我々教育隊も非常呼集によつて直ちに戦闘態勢に入り、二カ部隊に編成されて、小松大佐を部隊長に東京城方面と、片や荒木少佐を部隊長として磨刀石方面へ、対戦車陣地構築のためそれぞれ出発したのが九日の夕方であつた。

私は小松部隊の連隊砲中隊に配属され、東京城方面へ出発した。東京城へ着いたのが翌十日の夕方、雨が降り出していた。到着すると直ちに夜営と炊飯の準備にとりかかったのであるが、直ちに命令が出て、さつき通過した小高い丘の峠まで引き返して、対戦車陣地を構築する事になった。

その時私は命令受領を命ぜられ、北海道出身の成田候補生を伝令につけてもらい、中隊長は馬で先行するので、二人で後を追跡するよう命ぜられた

松山農業学校卒業後は、道後にあつた県立農業試験場に就職し、当所にあつた四国地方農林省小麥育種試験地で育種の仕事に従事していたが、戦争も次第に激化してきたので、どうせ早晚戦争に行かねばならないのならば一日でも早く行ってやれと思ひ、適齢を待たずに現役志願で合格し、旧満州国宝東にあつた丸亀第十二連隊要員として丸亀に仮入隊し、十日後には宝東の第九百三十六部隊六中隊に入隊した。

昭和二十年四月には本土防衛という事で高知県へ転属したのであるが、我々約百二十人の者は残務整理を命ぜられて、五月には西東安の近くにあつた独立歩兵大隊に転属になり、昭和二十年の六月には牡丹江の近くにあつた石頭の関東軍予備士官学校に派遣を命ぜられたのである。初年兵から連隊砲の教育を受けていたので、教育隊でも連隊砲として、六中隊の七区隊に配属になったが、六中隊には速射砲や大隊砲（曲射砲）も同じ中隊であつた。我々の連隊砲には、砲の運搬に使う馬を

ので、二人の夕食の準備は他の戦友に頼んで、飯も食わずに先ほど来た道を伝令の成田候補生と二人で空腹のまま中隊長を追跡したのである。陣地予定地は東京城より十五キロメートルぐらい後退した所で、小高い丘になっていたが、もう陽はとつぷり暮れて相変わらず小雨が続いていた。雨の中を外套もつけず伝令と二人で真っ暗な道を引き返したが、途中はソ連軍を逃れて民間の人達が、主として開拓団の人達であろう、中には幼児を背負い荷物を背負った幼児の手を引いて、雨の夜道を避難する人達が続いている。隊列に逆行して、誰も言葉も交わさずただ黙々と二人は中隊長の跡を追つたのである。陣地構築の予定地である丘の麓まで行つた所で馬上の中隊長は我々二人を待っていた。そこで本隊が来るまで待つ事になり、道の上の傾斜地に三人は腰をおろして、中隊長は寝るから本隊が到着したら起こすように言つて先に寝てしまった。二人は相談して本隊が到着するまで交替で寝る事にして私が先に寝たのであるが、

しばらく経って隣で寝ていた中隊長が起こすので起きてみると、隣の成田君も寝てしまっているではないか。中隊長は慌てて下の道路へ飛び降り、雨上がりの道路の足跡を見て本隊が通過しておる事を知り、二人に追跡するように命じて、馬に飛び乗り本隊を追っかけて行つた。二日ばかりは寝ておらず空腹で無理もなかった。二人はすぐに中隊長の跡を追って行くと、二、三キロメートル行つた所で中隊長も本隊も待つており、直ちに作業に取り掛かり、一日がかりで砲の陣地と個人援体の構築を完了した。更に一日待機したが敵戦車接近の情報は全く入らず、また磨刀石方面へ行つた荒木部隊の状況も全く分からないまま現在の陣地を放棄して敦化へ集結するよう命令されたのが八月十五日ごろだったと思う。それから夜になると歩いて、昼は寝て休養し、鏡泊湖に沿って南下した。約十日経過していたと思うが、敦化へ到着してみると、既に大勢の日本兵が集結していた。

八月末頃だったと思うが、八月十五日の終戦の立って私物の写真や手帳、日記、地図等紙類は全部提出せよという事で、今まで大切に持っていた自分の写真や戦友、家族の写真等も全部出してしまった、ウラジオストックから帰すという事も半信半疑で、もしもの時のために「極東ソ軍情報」という本の付録についていたシベリアの地図を切り取って磁石と一緒に自分の枕の中に隠し入れて携行する事にした。

十月末に敦化から牡丹江まで一週間ぐらいかかったと思うが、その間我々の隊列には自動小銃を持ったソ連兵が付ききりで、隊列から離れる者に対しては銃口を向けて隊列に戻され、あたかも牧童に追われる羊の群れのように、この時初めて敗戦の憂き目をつくづくと感じたのであるが、今更どうする事もできなかった。

牡丹江からは、貨車の中に二段式の寝台を造り、その中に二十人ぐらいずつ詰め込まれたが、ウラジオストックまでの辛抱だと思い、皆喜んで乗り込んだ。しかし列車は牡丹江から南下せず、なぜ

事は全く知らされていなかったのである。途中で関東軍命令という事で弾薬類すべてを集結して日本軍のトラックで持ち去って行つた事を不思議に思っていたところ、東京城に到着すると砲、機関銃、小銃、拳銃すべてを返納するように命ぜられ、戦争が終結した事を初めて知つたのである。戦友達の情報では停戦協定が結ばれたという事で、最初のうちは条件つき停戦協定が結ばれたという事のように思い、無条件降伏という事を知つたのはしばらくたってからであった。

それからはウラジオストック経由で帰るという事で、約二カ月間自給自足の生活を続けたが、満州ではもう十月に入るとめつきり寒くなり、朝晩は霜が降るようになった頃、牡丹江から列車に乗るために牡丹江までは徒歩で行くように指示された。もう持っている物もほとんど使い尽くし、時計や万年筆等もソ連兵に取られるか黒パン等の食料と交換して食べてしまい、ちり紙やタバコの巻紙にも不自由をするようになっていた。出発に先

ソ連領に入ってウラジオストックまで南下するの
か一抹の疑問は持っていた。列車は東進して、国境の町、綏芬河を通過すればソ連領内に入るはずである。移り変わる外の風景を注意深く見守っていたが、いつからともなく線路伝いに立っている電柱の格好が変ってきたと同時に建物の格好も満州のものとは全く違って来たので、列車は既に国境を通過してソ連領内に入っている事が分かった。

ソ連領内に入ってシベリア鉄道をウラジオストックに向つて南下するのであれば、夕陽は進行方向に向つて右側に落ちる筈であるが、左側に落ちてゆくので、翌朝、日の出を注意してみると、陽は右側から昇ってくるので、列車は北上している事に気がついた。途中列車は時々停車するのであるが、一旦停車すれば一時間、二時間の停車はザラである。ある駅に止まった時、ソ連の民間人が黒パンを持って来て、日本兵に対し靴下や石鹼と交換を要求していた。ソ連国内でも長年独ソ戦を続けていたので民間人の生活物資は極端に不足

しており、また日本人が食料を欲しがっている事を知っていたのである。我々もその当時はまだ靴下や石鹸を多少持っていた。空腹のあまり交換する者もいたが、私もそのときに、中年の太った女性が黒パンを小脇に抱えて交換に来たので、枕の中に隠し持っていた地図を広げて、機関車の方を指差して「モスクワ」と尋ねると、この女は何も言わずに後方に走って行った。

不思議に思っていると、さっきの女の案内でやって来た将校が拳銃を抜いて、通訳を通じて、この車両の中に写真を持っている兵隊がおるはずだが、持っておれば今すぐに出すように要求した。私はその時、地図と写真を通訳が間違えて伝えた事を感じたが誰も写真は持っていないと返事をした。すると将校は「では、車内を一斉検査をして、もし出てくれば処罰する」と言ったので、他の戦友達が「もう皆が迷惑するから池田、地図を出せ」と言うので枕の中に隠していた地図を出して将校に渡すと、「お前の処分は後ほど指示する」と言っ

ている枯木を長いままで持帰り、ペーチカの扉を開けたままで、燃えるに従って人が奥へ入れてやる必要があった。食事は満州から運んで来たものであろう、緑豆や高粱を煮て岩塩で味付けしたものが飯盒の蓋に半分ぐらいが一食分で、中に入っている豆の数も五十粒で黒パンも何もなかった。時には大豆や高粱の原殻をそのまま煮たものもあったが、空腹のあまり食える物は何でも食わなければ生きるためには仕方がなかった。薪を採りに行く時には、山の中に何か食えるものはないかと雪の中を探したが、冬のシベリアでは食えるものは何もなかった。白樺の古木の枝に髪の毛のような細い苔が垂れ下がっていたので、持帰って雪を溶かして飯盒で煮てみたが、いくら煮ても食えるようなものにはならなかった。ただ、雪路をトラックが運ぶ時に落とした馬鈴薯が凍って真っ白に霜が降っていたものを拾って持帰り、ペーチカの火で焼いて食べた味のうまかった事は今でも忘れる事はできない。しかし時折馬糞の凍ったのが混じ

って通訳を連れて帰って行ったが、それからは何も言う事はなかった。通訳をしていたのは朝鮮人のようなだったが、私が感心したのはあの一老婦人がこのような事を軍の将校に報告するという防諜意識が徹底している事には感心させられた。

ハバロフスクを過ぎて、しばらく行った所の小さな田舎駅で降りると、もう一面真っ白な雪景色であった。倉庫のような建物の中で一泊し、翌朝トラックで雪原を半日ぐらい走り、丸太を積み重ねて造った建物の収容所に到着した。以前には囚人が使っていた所らしく、周囲は柵で囲まれて炊事場や浴場滅菌室、柵の外には厩等の建物もあり、各棟には四角い箱を伏せたようなペーチカ(暖炉)も取り付けてあり、手分けして各部屋の清掃や、薪採り、防寒用被服の配分等に一日を費やした。

シベリアの冬は昼の時間が極端に短く、朝太陽の出るのが八時頃で、夕方五時頃にはもう薄暗くなるのだが、夏はこれの逆であった。炊事や暖房用の薪も雪の中を探して鋸も斧もないので倒れて

っていて、焼いている途中で解けてきてガツカリする事もしばしばあった。

作業は鉄道建設の路盤工事予定地の原始林の伐採作業と、切った用材の馬櫓での運搬や製材所での雑役作業が主であった。製材所では薪をたいて蒸気機関で機械を運転しており、石炭や油が不足していたものと思われた。

伐採は二人用の鋸で二人が向い合って伐るのであるが、雪が深いために倒れる前に避難用の途を十文字に除雪しておくのであるが、木が凍っているために逃げた方向に木が倒れて来る事もあり、教育隊からの親友であった東京の森田候補生もここで木の下敷きになって亡くなったのである。抑留された日本兵が飢えと寒さと重労働に耐えかねて、毎日のように倒れていったのもこの時期である。倒れた者は医務室に連れて帰るが、医務室と言っても医薬品はなく、身体検査と死体の処理が仕事のように、死体は衣服を利用するために裸にしてトラックに積んで埋めに行くのである。冬は

凍土のために穴が掘れず、浅い所に埋めて上に土を掛けるのであるが、時によっては二人三人を一カ所に埋める事もあった。

午後の十時には点呼をとって就寝であるが、ある点呼時に用材運搬のための馬の馱者がいるので、馬の経験者は申し出るよう通訳から伝達があったので、私も連隊砲で馬を扱って、いたので申し出た。すると明日から厩へ行くように指示があった。しかし厩の作業は作業開始前の準備作業と作業終了後の後始末の作業や厩不寝番の作業が大変である事は知っていたが、厩には馬糧があるのが目当てであった。厩に来てみると成るほど満州から運んで来た大豆粕や高粱、燕麦、岩塩等人間の食えるものが幾らでもあるので安心した。

作業は、予期した通り、伐採した用材、主として落葉松（カラマツ）、椴松（トドマツ）等で十メートル以上もある用材の片方を橇につけて雪の上を滑らせて製材所まで運ぶ作業で、むしろ伐採より楽であった。

ソ連ではクリスマスも正月もなかったが日曜日だけは休ませてくれた。

年が明けて一月中頃にソ連軍医による身体検査があった。身体検査といっても女医が一人一人の尻の皮をつまんで肉付きを見て、一級、二級、オカの三等級に分類して、オカ（弱兵）になると別の収容所に送られて、軽作業で療養する事になるのだが、小生もオカになってホルモリン地区の収容所に移動になった。この収容所では倉庫での漬物作りの作業や、青刈用タバコの乾燥作業、豚のえさやり等が主な作業であった。作業は大分楽ではあったが、作業場ではソ連人と一緒に言葉が通じず不自由だったので、ロシア語を一生懸命覚えざるを得なかった。ここでつくづく感じたのは、外国語を習う時は日本語が使えない所に行けばすぐに覚えられる事を痛感した事だった。

ここで半年ぐらい経った頃身体検査があり、体重も増えて二級になったので他の収容所へ移動する事になり、一人だけトラックに乗せられて二、

十二月に入って、寒さのきびしい朝だった。馬が一頭急死した事があり、ソ連側では日本人が故意に殺したのではないかと疑ったのか獣医を連れて来て解剖したが別に異状を認めず、山の中の枯木を集めて来て解剖した馬の上に乗せ火をつけて焼いておくように指示して帰って行った。獣医が帰るのを確認すると誰言うもなく「火を消せ」と言って、馬上につけた火を消してしまい、馬の頭、胴、足、内臓等を別々に分散して雪の中に埋めて目印をして分かる様にして置き、後から掘り出して食べる事にした。一回凍ってしまえば、もう来年の四月頃までは大丈夫である。それからは毎晩十時の点呼が終れば既に集合して埋めていた馬体を少しずつ掘り出して岩塩をつけて焼肉にして食べたが、一カ月くらいの間に六人の当番だけで全部食べてしまったのである。これはわずかな期間で馬一頭分というわずかな量であったが、その時の食糧難と栄養不足を補う効力は充分にあったと思っている。

三時間走った所のフォルモリン地区のホルホーズに移された。以前に身上調査があった時、出身学校が農業学校で職業が農業試験場と言った事があったので、この関係ではないかと独り考えた。着いてみると広い農場に燕麦や煙草、馬鈴薯等が植えてあり、農場の面積は約五十ヘクタールで、周囲は四方を白樺林で囲まれており、農作業用の馬が二十頭と乳牛が五十頭ぐらい、子牛が約五十頭、肉用の若豚が百頭ぐらいおり、他に農業用倉庫が二棟、温室が一棟あり、これを五十人ぐらいの囚人で管理されていた。所長はいつも白い馬に乗って農場を巡回していた。女の囚人も四、五人いたようだったが、風呂場、洗濯場、パン焼室、殺菌室等に勤務しており、男子囚人とは職場から分離されていた。

男子囚人の中には、かつての独ソ戦でドイツの捕虜になり、自国ソ連に鉄砲を撃った兵隊もあって、独ソ戦の様子も片言のロシア語を交わしながら聞く事ができた。

コルホーズでの作業は馬鈴薯の植付から燕麦の播種、牧草の刈取、運搬、サイロの詰込等、倉庫での作業はキャベツの漬物作り、青刈煙草の刈取、乾燥が主体だった。秋の収穫が終る頃にはまた転属になって、今度はコムソモリスク市郊外にあった日本人と一緒にの収容所で建築関連の作業に従事する事になった。

この頃からは「日本新聞」も頻繁に届くようになり、民主教育も盛んに行われるようになって、リーダーが各収容所を巡回して各収容所に委員会を組織し、共産主義思想の普及やソ連の国家社会の優位性を吹聴して、日本を卑下する宣伝活動が盛んに行われるようになって来た。しかしながらこのような思想教育の受認の程度については個人差があつて、中には表だつては言わないが、日ソ不可侵条約を破つて満州に侵攻し、わずか一週間ぐらいの戦闘で莫大な物資と糧秣を掠奪して、終戦後に六十万の兵力をシベリアに拉致し、酷使して顧みない国の優位性がどこにあるのだろうと語

をよこさなかつたため、ソ連が終戦後に六十万の兵隊を抑留して強制労働に使用した事を正当化するために躍起であつた。

復員船が入港すると、看護婦さん達がタラップまで迎えに降りてくれて、「御苦労さんでした」という言葉をかけてくれた事は嬉しかった。船は貨物船で、船室の天井の鉄板から水滴が寝ている顔の上に落ちてくるのには閉口した。ナホトカを出港すると皆で甲板に出て四年間もいたシベリアの大地を振り返つたが、何の未練も感じず、むしろ日本列島が早く見たくて仕方がなかつた。

ナホトカを出て四日目に舞鶴港の松の木が見えて来た時に、やっと日本に帰つたという実感が湧いてきた。舞鶴港の栈橋に降りると旧海軍の兵舎まで警官が並んで出迎えてくれたのは極めて印象が悪かつた。復員業務は旧海軍の兵舎で行われたが、出迎えに来てくれた父兄達は西舞鶴駅に釘付けされていたらしい。復員業務が終ると、各府県ごとに分散して国鉄の乗車券をくれて乗車したが、

り合う者もいた。民主教育に異を唱えれば、反動主義者という烙印を捺されて、煙草の火も貸さず会話も途切れて、食堂でも椅子を貸さず土間に座つて飯を食わされる所もできて、日本人が日本人に苛められたのもこの頃である。

昭和二十四年の春頃になると、ダモイ（帰還）の噂がどこからともなく収容所の内部でチラリチラリと聞こえるようになったが、他の収容所の情報は全く入らなかつた。

昭和二十四年の七月になって、帰還のためにナホトカに集結だという事で、急に集合せよという事になり、トラックに分乗してハバロフスクまで出た。ハバロフスクからは貨車に詰め込まれて発車したが、今度は右側に太陽が沈むので列車が南下している事は間違いなかつた。

ナホトカに到着してみると他の収容所からも大勢集まつており、船の到着を待つていた。十日間ぐらいいは何もすることなく過したが、民主化運動のリーダー達は、我々の復員が遅れたのは復員船

愛媛県の場合は姫路駅まで県の担当者が出迎えてくれた。

松山駅に着くと当時の県議会の議長だつた立川明さんが出迎えてくれ、丁寧な挨拶を頂いた。その時、駅前から見た松山市は焼野原で、県庁まではほとんど建物はなく、皆バラック建てだつた。

家に帰ると丁度お盆であつた。出発する時は村長を始め小学校の児童達が全校生徒日の丸の小旗を振つて国鉄駅まで見送つてくれたものだが、帰つた時には村役場の係の者と近所の者が二、三人駅で迎えてくれただけだつた。しかし駅に降り立って眺めた河や山の景色は昔のままであつた。

「国破れて山河あり」とはこのことであろう。

中国や南方で長期にわたつて戦つた郷土の友達も、昭和二十年八月の終戦と同時に復員した者もあり、ほとんどの者は翌年までには復員して、それぞれ社会生活に入つていたが、我々満州にいた者はわずか六日間のソ連との参戦で四年間も強制抑留されて、社会に復帰した者は生活基盤の構築

に出遅れ、障害になった事は否めない。

不幸にして抑留中に飢えと寒さに倒れた六万余の戦友は、未だ大半がシベリアの地に眠ったままである。墓参団を募って毎年シベリアに行っているが、一部の特定の地区だけを整備して、巡回させているのであって、大半の者は墓参団が入れない所に眠っているのである。

明治三十八年の日露戦争のときのロシア人捕虜が松山に約六千人来ていたそうであるが、その当時の報告では主として寺に分散収容して、道後温泉はもちろん、五色浜の海水浴場や芝居等にも連れて行って、比較的自由な行動を認めており、死亡時には一人一人葬儀を行い、名前を刻んだ石碑を建て、今でもボランティアで老人クラブや勝山中学校の生徒が墓掃除をしているそうである。

終戦から既に六十年を経て、当時二十歳前後だった我々もすべて八十歳を越えてしまい、その間日本は、戦後の平和に支えられて経済復興を成し遂げ、もはや戦争を知らない世代が七〇パーセン

トを占めるようになり、平和を当たり前のようになっているのではないだろうか。今の内に我々の戦争体験を若い世代に語り伝えて、戦争のない平和な日本の将来に資する事が責務ではないかと考えている。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十三年七月二日

学歴 旧制松山農業学校 卒業

職歴 農林省四国試験地

愛媛県農業試験場

農業改良普及員

軍歴 丸亀歩兵十二連隊入隊

満州九百三十六部隊

石頭関東軍予備士官学校

コムソモリスク その他

昭和二十四年八月十一日

農協理事

長浜町町議会議員

帰国後職歴

帰国月日

抑留地

財団法人全国強制抑留者協会愛媛県支部の理事として、平成十三年松山市、平成十六年今治市、平成十七年宇和島にて「語りつぐ会」の講師として、シベリア抑留体験の豊富な諸々の体験談を観衆に分り易く説明、納得させて好評のある講師としてすばらしい方で、今後も益々のご自愛のもと支部の柱として頑張って頂きたい役員であります。

(愛媛県 山本 繁夫)

収容所正門横一カ所に 埋葬した八十〜百人を祖国に

熊本県 村田 昭三

昭和十九(一九四四)年十一月全満州義勇隊訓練生に、臨時軍派遣計画実施。我々北安省海倫県義勇隊萬順訓練所第五次川元中隊二百五十人中九十人は興安北省ハイラル二六四六部隊「第一九野戦貨物敵」札蘭屯駐屯地分散作戦に派遣。

駐屯地は山間を利用し大きな倉庫が建設されていた。近くに満人部隊があり、初めて見る驢馬、体は小さいが鳴き声は凄い声を出していた。このの兵隊さんは召集兵にみえ優しい人達であった。班長は石川上等兵(栃木出身)、炊事班長は安田上等兵。犬の餌を日に二回頂きに行くので大変お世話になった。食事は糧秣を扱うだけあって待遇はよく、身なりも新品同様裕福な兵隊さんに見えた。自分等は襟章がないだけで風呂も一緒、すべてが